

インドと日本をつなぐ郷土の日本画家

—初転法輪寺の仏伝壁画大下図(大本山永平寺蔵)を特別展示—

の う す こう せ つ 野生司香雪とサールナートの仏伝壁画展

- 作品展・写真展 会期 令和2年9月1日(火)～6日(日) 午前9時～午後5時
- フォーラム 日時 // 年9月1日(火) 午後1時30分～3時40分
- 会 場 香川県立ミュージアム(特別展示室・講堂) 高松市玉藻町5-5 TEL 087-822-0002

入場料 無料

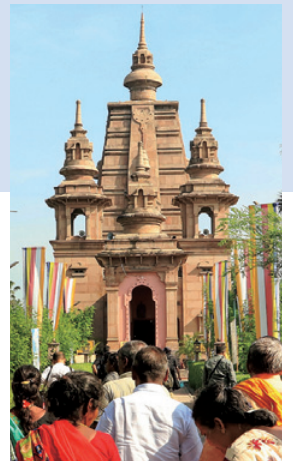
※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスク着用、手指の消毒等にご協力お願いいたします。
体調不良の方は来場をお控え下さい。また状況により中止になることもありますのでご注意下さい。



- 主 催 野生司香雪画伯顕彰会(香川県高松市出作町162-36 TEL 087-889-0330)
- 後 援 インド大使館、香川県、高松市、香川県美術家協会、香川県写真家協会、高松市文化協会、
(公財)日印協会、(公財)中村元東方研究所、(公財)仏教伝道協会、
(公財)文化財保護・芸術研究助成財団、(学)淑徳学園、(学)武蔵野大学
- 特別協力 大本山永平寺
- 協 力 (株)トラベルサライ、(有)彩色設計、ディスカバーインディアクラブ(DIC)

昭和6(1931)年。スリランカのダルマパーラがインドでの仏教再興を願い聖地サールナート(鹿野園)に初転法輪寺(ムーラガンダクティー・ビハール)を建立しました。彼は堂内に仏伝の壁画を描こうと、仏教国の日本に依頼、そして野生司香雪が選ばれ、日本の画家を代表し渡印、昭和7年から苦節5年をかけて、全長42m、高さ4m余の日本画の仏伝、お釈迦様の一代記を完成させました。

壁画は今ではサールナートの仏伝として世界に知られ、世界の文化遺産ともいわれています。制作開始から88年、壁画の剥落が進み、今、日本の手での保存修復を始めました。この機会に、香雪の故郷で作品展・フォーラムを開催し、香雪の描いた仏伝壁画や壁画のある初転法輪寺を皆様にご紹介します。



初転法輪寺・正面

① 香雪作品展『野生司香雪サールナートの仏伝壁画』

● 2階 特別展示室

初転法輪寺がやって来る!! 壁画大下図を故郷で大公開。また大正～昭和期の作品もご紹介。



壁画(初転法輪寺)



「村女の供養」

大下図(大本山永平寺蔵)



「聖母」昭和10(1935)年頃



「窟院の朝」大正9(1920)年 再興第7回院展(六曲一双屏風・香川県立ミュージアム蔵)

② 森川輝男写真展『聖地インド・香雪とサルナート』

● 2階 特別展示室

ガンジス河の沐浴で有名な聖地ベナレス。その北にある小さな町が仏教聖地サルナート（鹿野園）で、町の象徴は2,500年程前に仏陀が初めて説法した場所に立つダメークの塔。そこに接して香雪が仏伝壁画を描いた初転法輪寺がたち、のどかな周辺にはこの土地の人々の暮らしがあります。香雪の足跡を訪ね聖地の今の人々や風景、寺院、遺跡などを紹介します。

◆【森川輝男プロフィール】 香川県高松市生まれ、写真家、日本写真専門学校卒業、香川県写真家協会会長



聖地の象徴・インドの現代アート



鹿野園の遺跡群（遠くに初転法輪寺の塔がみえる）



五比丘と釈迦の像



聖地沐浴



飾るおんな



ガンガーの日の出

③ フォーラム『インドと日本・野生司香雪の仏伝壁画の背景』

● 地下1階 講堂

なぜ、香雪がインドで仏伝壁画を描くことになったのか……。その背景となる近代の岡倉天心、横山大観、詩聖タゴールらインドと日本の芸術家の交流史、また、インド側から見た仏教や香雪の壁画の意義。そして不思議な力に導かれるように渡印し壁画を制作することになった香雪の生涯、壁画揮毫の機縁・苦労を主として芸術の立場から紹介します。

日時 9月1日(火) 開場 13:00

会場 香川県立ミュージアム 地下1階 講堂

13:30 開演 ごあいさつ(インド大使予定)

13:40 「タゴール・天心から香雪までの日印芸術家交流」
大木札子 さくら市ミュージアム 荒井寛方記念館 学芸員

14:10 「聖地サルナートとインドから見た仏伝壁画」
Dr. シッダルト・シン インド大使館ヴィヴェーカーナダー文化センター(VCC)所長(元バナールス・ヒンドゥー大学教養学部パーリー語・佛教学科長)

14:40 「野生司香雪の生涯と仏伝壁画の揮毫」
溝渕茂樹 元徳島文理大学非常勤講師

15:20 質疑応答

15:40 閉会あいさつ
生田要助 野生司香雪画伯顕彰会会長

【野生司香雪の略歴】日本画家 仏画家

明治18(1885)年 香川県高松市生まれ(本名述太^{のぶた})
香川県工芸学校(現高松工芸高校)から東京美術学校、卒業後は横山大観らの再興日本美術院に参加し院友として活躍。大正6(1917)年仏教美術研究でインドに遊学。現地でアジャンタ壁画模写に向かう荒井寛方に誘われ参加。同9年にその体験を描いた「窟院の朝」が入選。47歳の昭和7(1932)年、選ばれて初転法輪寺の壁画を描くために再び渡印し、5年がかりで描き完成させた。

帰国後に、長野県の善光寺納骨堂の壁画揮毫の依頼を受け長野に移り、善光寺縁起の壁画を戦後完成させた。インドから聖白牛を招来。また、持ち帰っていた初転法輪寺壁画の天下図を大本山永平寺に献納。晩年は長野市の北、渋温泉の地に移り終の棲家とした。

昭和48(1973)年、88歳で没する。昭和11年から戦後まで香川県美術展覧会(県展)の日本画審査員。

近年、インドの仏伝壁画も制作開始から88年が経ち、剥落が激しくなり、壁画の管理者、インド大菩提会が香雪の精神を継ぐ日本の手で保存修復、保全を呼びかけ続けており、応えて昨年から工事が始まった。



— 初転法輪寺仏伝壁画保全のための募金活動を行っています。 — URL : <https://nosu.info/>
詳しくは募金事務局 (090-3186-2069又は087-889-0330) までお問い合わせください。